

教師のメンタルヘルスと対人関係に関する研究の展望

草海, 由香里

(出版者 / Publisher)

法政大学大学院

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大学院紀要 = Bulletin of graduate studies

(巻 / Volume)

84

(開始ページ / Start Page)

9

(終了ページ / End Page)

15

(発行年 / Year)

2020-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00023128>

教師のメンタルヘルスと対人関係に関する研究の展望

人文科学研究科 心理学専攻

博士後期課程3年 草海 由香里

抄録

現在、学校現場においては児童・生徒による暴力行為、いじめ、不登校などが増加している。また、学校に対する保護者から寄せられる苦情が社会問題化している。これらの問題に対処するため、教師は日々の学習指導や生徒指導のほかに、かなりの時間と労力を費やしていることが推測できる。頻発する学校生活上の諸問題は、教師のメンタルヘルスに大きな影を落としていとされているが、教師のメンタルヘルスへの対応は不十分である。こうした状況の中で、公立学校教師の精神疾患による病気休職者数は、2007年度以降、5,000人前後で推移し、高止まりの状態が続いている。

これまで、わが国において行われた教師のメンタルヘルスに関する研究からは、「多忙」、「生徒指導」、「学級経営」、「事務活動」、「校務分掌」、「部活動」、「問題行動」、「教科指導」といった要因が、教師のメンタルヘルスに影響を及ぼしているとする結果が得られていたが、近年では「同僚」、「管理職」、「児童・生徒」、「保護者」等の対人関係と、バーンアウトやストレスとの関連を検討する研究が多くなってきた。

本稿においては、教師のメンタルヘルスと教師を取り巻く対人関係について検討したこれまでの研究を概観することを通し、今後の研究の方向性を展望した。

キーワード：教師、メンタルヘルス、対人関係、バーンアウト、ストレス

A Review of Research on Teachers' Mental Health and Interpersonal Relationships

Abstract

Problems among students, such as violent behavior, bullying, and truancy, are currently on the increase in schools. Complaints from guardians have also become one of the main social problems in Japan. Teachers may find themselves spending more time and effort dealing with these problems than doing their routine work. Frequent occurrences of these problems can be expected to have a negative influence on the teachers' mental health but effective treatments are not provided to them. Under these circumstances, the number of public school teachers who take a leave of absence because of mental health problems has remained steady at around 5,000 per year since 2007.

While past studies conducted in Japan on teachers' mental health focused on problems such as work pressure, student guidance, classroom-management matters, office work, division of school affairs, extracurricular activities, problematic behavior, and teaching subjects; in recent years there has been an increase in studies from other viewpoints, i.e., interpersonal relationships (between the teachers and their colleagues, managers, students, and guardians of students) and burnout or stress.

In this paper, the author reviews the studies that have examined teachers' mental health and their interpersonal relationships. Thereafter, the author suggests promising directions of future research in this field.

Key words: teacher, mental health, interpersonal relationship, burnout, stress

I. 問題と目的

現在、学校現場では児童・生徒のいじめ、非行、不登校などの問題が深刻化している。文部科学省の調査によると、2017年度には、公立小学校の78.7%、公立中学校の82.9%でいじめが認知され、公立小学校児童が27,696件、公立中学校生徒が27,511件の暴力行為を学校内外で起こしたと報告されている（文部科学省、2018a）。また、公立小学校の56.4%、公立中学校の88.4%に不登校生徒が在籍していることも報告されている。さらに、最近では限局性学習障害、注意欠如・多動性障害、自閉症スペクトラム障害などの発達障害のために、生活や学習に困難を抱える児童・生徒の増加が指摘されている（文部科学省、2018b）。

一方、保護者に関しては、学校給食費の未納問題や、学校や教師に無理難題を突きつける「モンスターペアレント」と呼ばれる保護者の増加が指摘されている。とりわけ、「モンスターペアレント」の存在は、教師のストレスを増加させるだけでなく、うつ病や自殺など最悪の状況に教師を追い詰める要因にもなっている（船水、2009）。また、給食費未納の保護者に対しても、学級担任や学校事務職員、校長、教頭等による電話や文書による督促、家庭訪問などの取り組みがなされており、本来、教育の充実に取り組むべき時間や労力が、こうしたことへの対応に割かれているという問題が生じている（文部科学省、2018c）。教師はこれらの多様な問題に対応するために、多忙を極めているのが現状である。

頻発する学校生活上の諸問題は、教師のメンタルヘルスに大きな影を落としている（曾山・本間、2006）。文部科学省（2018d）によれば、2017年度に病気休職した公立学校教師は7,796人である。そのうち精神性疾患により休職した公立学校教師は5,077人で、前年度より186人増加した。この休職者数は、調査が始まった1979年度（664人）のおよそ8倍にあたる。

教師のメンタルヘルスの悪化は、児童・生徒に対する言動や態度にも悪影響を及ぼす（伊藤、2007）。そして、教師がストレスから受けた悪影響が、児童・生徒のストレスを高め、それが問題行動を引き起こし、結果として教師をまた苦しめる、という悪循環に陥る可能性が高まる。伊藤（2007）は、「どこかでこの鎖を断ち切らないと、学校はストレスの増殖場所となり、不登校の児童・生徒と不登校の先生を大量生産してしまう」と警鐘を鳴らしている。

精神神経科に入院した教師と教師以外の職業に就いている人をあわせた約100名の症例報告によると、発病の原因あるいは憎悪因子としてのストレスは、教師の場合は大多数（93%）が職場内のストレスであり、その割合は教職以外の職業に就いている人（65%）に比べて明らかに大きかった。職場内ストレスの内訳は、学習・教科指導、生徒指導、校内・校外雑務、そして保護者対応など仕事に関するものと、同僚、児童・生徒、保護者に対する対人関係によるものであった（中島、1996）。中島（1996）は、教師という職業はさまざまな対人的対応を迫られる点に特殊性があると指摘している。医療現場からのこのような報告もあり、これまでの日本における教師のメンタルヘルスに関する研究は、どのような要因が教師のメンタルヘルスに影響を及ぼすかを中心に検討が行われてきた。

たとえば、四半世紀前の研究ではあるが、鈴木（1993）は、教師のメンタルヘルスに影響を及ぼしている要因のひとつとして「多忙」を挙げた。その後も、多忙をめぐる研究（秦、2001；平岡、2001）は続いており、生徒指導、学級経営（山本・杉江・山際・勝倉、1995；根田・河村、2001）、事務活動（岡東・鈴木、1997）、校務分掌、部活動、問題行動（勝倉・田中・杉江・山際・山本、1997；藤原・古市・松岡、2008）、教科指導（伊藤、2000）などの多忙に関する固有の要因が、教師のメンタルヘルスに悪影響を及ぼしているとする研究結果も得られるようになった。そして、2000年以降は、同僚（中川・小谷・西村・井上・西川・能、2000；赤岡・谷口、2009）、管理職（平岡、2003；藤原・古市・松岡、2011）、児童・生徒（佐野・水澤・中澤、2013；米川・大原・北川、2015）、保護者（福沢、2008；安藤・中島・鄭・中嶋、2013）との対人関係とメンタルヘルスの関連を指摘する研究が多くなってきた。

本稿においては、こうした研究の動向をふまえ、これまで整理される機会が少なかった、教師のメンタルヘルスを悪化させる人的要因、および教師のメンタルヘルスを支え得る人的要因を整理する。そして、そのうえで今後の研究の方向性を展望することを目的とする。

II. 方法

インターネットの検索エンジンを用いて、「教師」、「ストレス」、「バーンアウト」、「対人関係」、「メンタルヘ

ルス」などのワードで、文献、書籍、ネット掲載情報を検索し、おもに2000年以降の、「同僚」、「上司」、「児童・生徒」、「保護者」とメンタルヘルスとの関連について明らかにしている研究を整理する。

Ⅲ. 教師のメンタルヘルスと対人関係

1. 同僚からの影響

同僚からの影響を検討した研究では、同僚をストレス要因とする報告と、同僚をサポート要因とする報告がある。たとえば、中川他(2000)や赤岡・谷口(2009)などは、最もストレスを感じる対象として「同僚」をあげている。同僚に対するストレスは、児童・生徒に関する問題から発生する傾向にある。赤岡・谷口(2009)は、同僚に対するストレスは、児童・生徒への指導方針や教育観の相違、または保護者への対応をめぐる意見の相違に起因するものであり、ここから、教師の対同僚ストレスは、職務上のかかわりをもつ多様な対人関係と複雑に絡み合っているとしている。川瀬(2014)も、「教師間で教育観・価値観の違いを感じる」、「他の教師の児童・生徒に対する態度への疑問」などの経験を多く持つ教師ほど、バーンアウト傾向が高くなることを示した。

また、同僚との良好な関係が築けないことが、教師のメンタルヘルス悪化につながる。新井(2007)は、現職教師を対象とした調査により、「職員間の共通理解や協力が得られずに孤立」することや、「同僚とのトラブルやいじめ」が、バーンアウトの要因の上位であることを示した。吉武(2018)は、小学校教師の語りから、「精神的ストレスになるのは職場の人間関係。実質的な仕事より、精神的ダメージの方が疲れる」、「先生方のことなどは、どうしたらよいか本当に悩む」、「同学年の人間関係がうまくいっていない」など、同僚との対人関係に悩むことがストレスの要因となっていることを示している。

しかし、同僚によっては、教師を支える重要な存在ともなりうる。森下・葛西(2018)は、小・中学校教師を対象としたインタビュー調査により、同僚との人間関係に「過敏になる」、「ストレスを感じる」ことで「眠れなくなった」と語る教師がいることを報告する一方で、「安心できる同僚との関わりを持つ」ことで困難な状況でも楽観的な感情を保てる状況をつくり出すことができることも示した。

同僚に関する研究に、教師同士の人間関係の特徴についてまとめた報告がある。秦・鳥越(2003)は、男性教師より女性教師のほうが同僚教師との結びつきが強いことをあげている。たとえば、「授業のやりかたについて同僚教師によく相談する」と回答した割合は、小学校教師では、男性が29.8%なのに対し、女性は45.9%である。中学校教師においても、男性17.2%に対して、女性は30.4%である。同様に、「いまの学校で困ったり悩んだりしたときに相談できる先生がたくさんいる」との回答は、男性より女性のほうが高い割合で得られている。年代別では、小・中学校教師とも、若い教師ほど、同僚教師および管理職に授業のやりかたについて相談する割合が高い。そして、年配の教師ほど、ほかの教師の力量のなさにストレスを感じていることを示した。

これらの先行研究から、同僚はストレス要因にもなり得るし、サポート要因にもなり得るといえる。また、同僚との人間関係は、校種・性別・年代により差があることも読み取れる。

2. 管理職からの影響

管理職からの影響を検討した研究では、管理職が教師のバーンアウトやストレス要因となっているという結果が多く得られている。たとえば、平岡(2003)が行った教師バーンアウトモデルの考察において、「周囲との葛藤」因子に管理職・同僚・保護者からの否定的評価に関する項目が高い負荷を示した。このことから、教師は自分の仕事について管理職から認められないことに対して葛藤し、バーンアウトに至る過程が考えられる。

また、「管理職との葛藤」、「多忙」、「孤独性」、「非協働性」などの学校組織特性が、教師のバーンアウトにどのような影響を及ぼすかを検討した貝川(2009)も、「管理職との葛藤」、「多忙」、「孤独性」、「非協働性」のいずれもが教師のバーンアウトに悪影響を及ぼすことを示し、とくに「管理職との葛藤」、「孤独性」、「非協働性」得点は、中学校教師に比して小学校教師の方が高いことを明らかにした。

さらに、藤原他(2011)は、中学校教師におけるストレス反応に関連する諸要因について検討するため、ストレス反応の各下位尺度(「対人拒否」、「身体症状」、「教室忌避」、「焦燥感」、「集中欠如」、「抑鬱感」)を基準変数、ス

トレッサーの7変数（「生徒支援」、「生徒態度」、「授業」、「同僚」、「雑務」、「保護者」、「管理職」）を説明変数とした重回帰分析を行った。その結果、「管理職」に対するストレスは、教師の「対人拒否」および「教室忌避」に影響を及ぼすことを示した。

近年では、東京都教職員組合（2012）、社団法人日本産業カウンセラー協会（2012）、京都市教育委員会（2013）などから、職場におけるいじめが教師の休職や退職意識に影響を及ぼしているとの指摘や事例報告があり、校長自ら率先して教師を休職や退職に追い込んだ事例さえ報告されている。

一方、教師が認知する校長からのソーシャル・サポートについて検討した迫田・田中・淵上（2004）によると、校長による道具的サポートは教師のストレス反応を緩和することはないが、情緒的サポートは教師のストレス反応の減少に関わることを示している。そして、校長の専門性を認識している教師は校長からの道具的サポートを受け入れやすいが、校長が自分に圧力をかけていると認識している場合には、情緒的サポートをサポートとして感じ取りにくい傾向にあると、校長の勢力と校長からのソーシャル・サポートに対する教師の認知についても言及している。

これらの先行研究から、教師は管理職との関係構築に苦慮しかねないことがうかがえる。また、管理職から自分の価値を認められていないことに対する教師の葛藤や校長からのいじめが、教師のバーンアウトやストレス、さらには休職や退職につながっていることも認識できる。その一方で、校長や上司が教師のメンタルヘルス悪化の軽減に寄与し得ることが確認できる。

3. 児童・生徒からの影響

児童・生徒からの影響を検討した研究には、医療の立場からの報告がある。真金（2011）は、教師の職場内ストレスの内訳は、児童・生徒の指導上の悩みが42%、同僚・管理職との人間関係によるものが24%、保護者対応によるものが6%で、児童・生徒の指導上の悩みが最多であることを示した。

児童・生徒に関わる研究には、児童・生徒との関係がバーンアウト要因になっているとする報告がある。たとえば、伊藤（2000）は、バーンアウト傾向を規定する諸要因を経験年数により検討したところ、若年群はベテラン群に比して、教師という仕事の中核といえる「教科指導」、「児童生徒との関わり」に対する悩みを多く抱えていることを示した。とくに、児童・生徒は毎日向き合わなければならない存在であり、担任するクラスの児童・生徒はほとんど選択の余地なく決定され、しかも、1年間は変更が許されない。そのような状況の中で、児童・生徒との間に悩みを抱えていることは、教師にとってかなりのストレスになり、バーンアウト傾向（「個人的達成感の低下」）が高まる一因となることを示唆している。森（2007）も、中学校教師のバーンアウトと学校ストレッサー（「生徒・保護者への指導・対応の難しさ」、「管理職との関係」、「生徒・保護者との信頼関係のなさ」、「同僚教員との関係」）との関連を検討し、学校ストレッサーはバーンアウトの3側面（「情緒的消耗感」、「脱人格化」、「個人的達成感の低下」）へ影響を及ぼすことを明らかにしたが、とくに、「生徒・保護者への指導・対応の難しさ」の得点が他の下位得点に比べて有意に高いことを示した。

また、中学校教師におけるストレス反応に関連する諸要因について検討した藤原他（2011）は、「生徒指導」は「焦燥感」に影響を与え、「授業」は「教室忌避」および「抑鬱感」に影響を与えることを示した。川瀬（2014）も「学習指導の成果があがらない」、「児童・生徒がいうことを聞かない」、「思い通りに授業が進まない」などの経験が多い教師ほど、バーンアウト傾向が高くなることを示した。

問題を抱える児童・生徒と教師のメンタルヘルスとの関連を示した研究もある。佐野他（2013）は、学級内における問題行動児童・生徒の有無とバーンアウトの関連を検討し、問題行動児童・生徒がいる学級の教師はよりバーンアウトしやすいことを明らかにし、問題行動児童・生徒が学級にいることに対する特別な指導や、授業進行の遅れなどが直接の原因となりバーンアウトにつながることを示唆した。米川他（2015）も、47都道府県における子どもの諸問題（「暴力」、「いじめ」、「不登校の比率」、「学業成績」）が、教師のメンタルヘルス不全による休職率に及ぼす影響について検討した。その結果、有意な影響を与える因子として示されたのは不登校と学業成績であった。このことから、不登校の児童・生徒に対する支援が教師の精神的疲労に強く関係する可能性が示唆された。下田・武内（2015）は、担当学級内に問題行動の目立つ児童や個別支援が必要な児童などがいる場合、小学校教師は指導方法や対応に工夫が必要となり、疲弊が増大することを示した。

さらに、児童・生徒に対するストレスが教師を取り巻く対人関係悪化につながることを示した研究がある。Kusagai

(2018)によると、教師に対する児童・生徒の言動・態度などが教師のストレスになっている場合は、保護者に対しても、児童・生徒の指導に対しても、そして、管理職や同僚に対してもストレスを抱えている可能性が高い。

一方、児童・生徒との関係は教師のメンタルヘルスに影響を与えないとする報告がある。教職の特性と教師の心の病に関する研究を行った越智・志波(2000)は、児童・生徒と接する機会の多い教師ほど、「精神的な疲れや徒労感」を感じることが少ないことを明らかにした。また、「児童・生徒が支え」と考える教師ほど、「精神的な疲れや徒労感」を感じることが少ないことも示した。これらの結果は、児童・生徒と良好な関係を結び、児童・生徒との関係を自己のアイデンティティの根幹に据えることがいかに教師にとって大きな精神的支えとなるかを示唆している。ただし、教師は常に児童・生徒との関係を精神的な支えにできるわけではなく、「児童・生徒の冷めた目」や「児童・生徒たちの反応や発言の厳しさ」は、教師の「精神的な疲れや徒労感」と高い相関があることを明らかにした。

中学校教師の悩みと精神的健康状態との関連を検討した藤本・鎌倉(2000)は、教師の悩みには、「生徒指導」、「公私の時間の両立」、「学校問題」、「対応能力」、「生徒と接する時間不足」、「職場環境」、「保護者への対応」の7因子が含まれていることを明らかにした。そして、「職場環境」の悩みが大きい教師は精神的健康状態が悪く、「生徒指導」の悩みが大きい教師はその悩みをやりがいとして精神的健康を保っている。これは、上司や同僚との関係や長時間労働などの職場環境に対して悩むより、教師の本務である生徒指導に頭を悩ませていたほうが教師にとっては精神的健康度を損なわずにすむことを示すものと推測できる。つまり、それだけ職場の悪環境は教師の精神的健康状態にストレートに影響を及ぼすのである。

これらの先行研究から、教師にとって指導に困難を感じている児童・生徒とのかかわりはかなりのストレスとなっており、児童・生徒の言動が教師のメンタルヘルスに及ぼす影響は大きいといえる。一方で、児童・生徒との関係が教師のメンタルヘルスを支える要因ともなりうる面にも目を向ける必要がある。

4. 保護者からの影響

保護者からの影響を検討した研究として、教師のストレス反応やバーンアウトとの関連についてまとめた報告がある。福沢(2008)は、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の教師を対象に、ストレス反応(「活気(の無さ)」、「イライラ感」、「疲労感」、「不安感」、「抑うつ感」、「身体愁訴」)に教師ストレス(「学習・学級経営」、「多様な校務」、「生徒指導」、「保護者対応」、「職場の人間関係」、「個人的なこと」、「家庭生活」)がどのような影響を及ぼしているかを検討した。その結果、女性教師においては、「保護者対応」が「不安感」、「抑うつ感」、「身体愁訴」に正の影響を及ぼしていたが、男性教師では、どの反応にも有意な影響を及ぼしていなかった。また、安藤他(2013)は、保護者と連携をとり児童の学校生活の改善を図ろうと保護者と話し合いをする際、保護者と話が噛み合わず現実認識や目指す方向性がすれ違ふと感じることの経験頻度が多いほど、担任はストレスを強く抱えることを示した。川瀬(2014)も、「保護者からの批評」、「保護者との意見の食い違い」などの経験が多い教師ほど、バーンアウト傾向が高まることを示した。とくに、「子ども間のトラブルでの保護者への対応が、最も疲れる仕事」で、その子ども間のトラブルが「発達障害によるものではないかと疑われる場合、保護者の理解を得ることが難しい」という現職教師の声が報告されている(吉武, 2018)。

さらに、保護者からの影響で休職や退職、あるいは休職を意識するに至った教師を対象とした研究もある。石山・坂口(2009)は、休職もしくは退職の経験のある教師からの聞き取り調査で、経験者は30歳代と50歳代に最も多かったと報告している。そして、30歳代では「職場での人間関係」や「教育観の違い」が要因であるのに対し、50歳代では「生徒・保護者の変化」、「保護者からのクレーム」が休職や退職のきっかけとなっていたことを示した。このような結果から、保護者との関係がうまくいかないことによって生じるストレスが、教師の病気休職や退職を引き起こすほどの大きなものになっていると述べている。諸富(2009)も、教師のカウンセリングをする中で、保護者対応の悩みがここ10年で急増したことを指摘し、「教師を辞めたい」と訴える教師の約8割は、何らかのかたちで保護者からの攻撃を受けていると報告している。

近年は、生活スタイルの多様化から、教師が勤務時間外に保護者の生活時間に合わせて連絡をとり、保護者に対応するケースが少なくないことが、教師の身体的疲労を蓄積させたり(下田・武内, 2015)、教師に直接話すことをせず、保護者がSNSで教師に関する悪い情報を広めることが、保護者と教師の関係を複雑にしたりしている(吉武, 2018)。

一方で、「保護者」はストレス反応と関連していないとする藤原他(2011)の研究もあるものの、先行研究の大勢は、教師は保護者対応に苦慮しており、彼らから受けるストレスは性別や年代により違っていることを明確に読み取るべきである。

IV. 教師のメンタルヘルスと対人関係に関する研究の今後の課題

本稿では、教師のメンタルヘルスと教師を取り巻く対人関係について検討したこれまでの研究を概観することを通し、教師のメンタルヘルスを悪化させる要因、および教師のメンタルヘルスを支え得る要因を整理した。その結果、教師のバーンアウトやストレスには教師を取り巻く対人関係の多くがネガティブな影響を及ぼし得ることが示された一方で、ポジティブな影響も及ぼし得ることが示された。たとえば、同僚や上司は、ストレスになる一方でサポートともなる。また、生徒に関する問題がストレスになっている場合もあれば、教師のやる気につながる場合もある。

これらの結果をふまえると、教師が置かれている環境は厳しいことは確かであるが、教師は決して誰からも支援を受けられないわけではない。仮に児童・生徒や保護者との関係がこじれた場合でも、協力的に解決を図ろうとするサポートティブな雰囲気と組織体制が職場に確立していれば、やる意欲を低下させずに困難な状況に取り組んでいくことができる(新井, 2007)。

学校現場において、教師のメンタルヘルスに悪影響を及ぼす対人関係を調整することができるのは、職場の責任者である校長である。文部科学省(2012)も、教師のメンタルヘルス・ケアを行うキーパーソンは管理職であり、管理職による適切なバックアップが行われなければならないとして、校長のリーダーシップの重要性を示している。これまで国外の研究において、校長のリーダーシップは教師の意欲ややりがいを高揚させるが消沈もさせる(Johnson, 2008; Heidmets, & Liik, 2014)ことや、校長のリーダーシップが高いほど教師のストレスが低く、反対に校長のリーダーシップが低いと教師のストレスが高い(Marshall, 2015)ことが示されているが、わが国においては校長のリーダーシップと教師のメンタルヘルスに関する研究があまり行われてこなかった。今後は、校長のどのようなリーダーシップが、教師のメンタルヘルス維持・向上に望ましい影響をおよぼすかを明らかにし、教師を取り巻く対人関係に関する問題を、校長がどのように調整すれば良いのか、具体的な方策を検討することが求められる。

謝辞

本論文の執筆に際し、適切なお指導・ご助言をいただきました法政大学の吉村浩一教授に、厚く御礼申し上げます。

引用文献

- 赤岡 玲子・谷口 明子 (2009). 教師の対人ストレスに関する基礎研究 ——ストレス経験に関する教師の語り—— 教育実践学研究, 14, 159-166.
- 安藤 きよみ・中島 望・鄭 英祚・中嶋 和夫 (2013). 小学校学級担任の学級運営等に関連するストレス・コーピングに関する研究 川崎医療福祉学会誌, 22(2), 148-157.
- 新井 肇 (2007). 教師のバーンアウトの理解と援助 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, 6, 23-26.
- 藤本 昌樹・鎌倉 利光 (2000). 中学校教員の精神的健康に関する研究 ——教員の悩みの構造と GHQ の関連から—— 学校メンタルヘルス, 3, 74-79.
- 藤原 忠雄・古市 裕一・松岡 洋一 (2008). 小学校教員のストレス反応に及ぼすストレス関連諸要因の検討 日本教育心理学会第 50 回総会発表論文集, 639.
- 藤原 忠雄・古市 裕一・松岡 洋一 (2011). 中学校教師におけるストレス反応及びバーンアウトに関連する諸要因 ——ストレスラー・コーピング特性・ソーシャルサポート及び自己効力感—— 学校メンタルヘルス, 14, 169-180.
- 福沢 恵利子 (2008). 教師ストレスの背景要因に関する研究 ——校種・性別・年齢による違いを中心に—— 青森県総合学校教育センター 研究紀要, F9-05.
- 船水 泰秀 (2009). 保護者からのクレームに関する研究 ——小学校・中学校・県立学校におけるクレーム内容の比較を通して—— 青森県総合学校教育センター 研究紀要, F9-01.
- 秦 政春 (2001). 現代教師の日常性 (I) 日本教育社会学会第 53 回大会発表要旨集録, 312-313.
- 秦 政春・鳥越 ゆい子 (2003). 現代教師の日常性 (II) 大阪大学教育学年報, 8, 135-168.
- Heidmets, M., & Liik, K. (2014). School principals' leadership style and teachers' subjective well-being at school. *Problems of Education in the 21st*

- Century, 62, 40-50.
- 平岡 永子 (2001). 教師バーンアウトモデルの一考察 関西学院大学臨床教育心理学研究, 27, 17-25.
- 平岡 永子 (2003). 教師バーンアウトモデルの一考察 (2) 関西学院大学教育科学研究年報, 29, 23-31.
- 石山 陽子・坂口 守男 (2009). 教員の職場内メンタルヘルスに関する報告 (1) 離職・病気休職者からの聞きとり調査をもとに 大阪教育大学紀要 自然科学・応用科学, 57, 59-68.
- 伊藤 美奈子 (2000). 教師のバーンアウト傾向を規定する諸要因に関する探索的研究 ——経験年数・教育観タイプに注目して—— 教育心理学研究, 48, 12-20.
- 伊藤 美奈子 (2007). 教師のうつ病の理解と援助 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, 6, 18-22.
- Johnson, S. K. (2008). I second that emotion: Effects of emotional contagion and affect at work on leader and follower outcomes. *The Leadership Quarterly*, 19, 1-19.
- 貝川 直子 (2009). 学校組織特性とソーシャルサポートが教師バーンアウトに与える影響 パーソナリティ研究, 17, 270-279.
- 勝倉 孝治・田中 輝美・杉江 征・山際 勇一郎・山本 奨 (1997). 小中学校教員のストレスに関する研究 (3) ——性, 教職経験年数, 校種別の検討—— 日本教育心理学会第39回総会発表論文集, 331.
- 川瀬 隆千 (2014). 宮崎市における教師バーンアウトの実態 宮崎公立大学人文学部紀要, 21, 35-51.
- Kusagai, Y. (2018). Influence of occupational stressors, self-efficacy, and emotional support on consciousness of leave of absence and resignation of school teachers. *Bulletin of Graduate Studies, Hosei University*, 81, 65-71.
- 京都市教育委員会 (2013). パワーハラスメントのない職場にするために 京都市教育委員会総務部教職員給与課
- 真金 薫子 (2011). 教師のメンタルヘルスの現状について ——医療の立場から—— 学校メンタルヘルス, 14, 140-141.
- Marshall, I. A. (2015). Principal leadership style and teacher stress among a sample of secondary school teachers in Barbados. *Caribbean Educational Research Journal*, 3, 76-90.
- 文部科学省 (2012). 教職員のメンタルヘルス対策について (中間まとめ) 教職員のメンタルヘルス対策検討会議
- 文部科学省 (2018a). 平成29年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について 文部科学省初等中等教育局児童生徒課
- 文部科学省 (2018b). 平成29年度 特別支援教育に関する調査の結果について 文部科学省初等中等教育局特別支援教育課
- 文部科学省 (2018c). 学校給食費の徴収状況に関する調査の結果について 文部科学省初等中等教育局健康教育・食育課
- 文部科学省 (2018d). 平成29年度公立学校教職員の人事行政状況調査について 文部科学省初等中等教育局初等中等教育企画課
- 森 慶輔 (2007). 公立中学校教員のバーンアウト・プロセスモデルの検討 昭和女子大学大学院生活機構研究科紀要, 16, 61-72.
- 森下 佐知子・葛西 真記子 (2018). 教師が困難な状況を乗り越える過程での管理職・同僚とのかかわりについて ——動機づけシステム理論における感情体験に注目して—— 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科 教育実践学論集, 19, 49-63.
- 諸富 祥彦 (2009). 教師の悩みとメンタルヘルス 図書文化
- 中川 剛太・小谷 英文・西村 馨・井上 直子・西川 昌弘・能 幸夫 (2000). 教師の対人ストレス方略の臨床心理学的研究 (1) ——実態調査にもとづく基礎研究—— 教育研究(国際基督教大学学報1-A), 42, 101-103.
- 中島 一憲 (1996). 教師のストレスとメンタルヘルス 土居健郎 (監) 学校メンタルヘルス実践辞典 (pp.695-704) 日本図書センター
- 根田 真江・河村 茂雄 (2001). 中学校女性教師のバーンアウトを規定する要因の検討 教育心理学会総会発表論文集, 43, 361.
- 越智 康詞・志波 利香 (2000). 教職の特性と教師の「心の病」に関する研究 ——「教師=生徒関係」への理想と現実の差異に着目して—— 信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要『教育実践研究』, 1, 19-28.
- 岡東 寿隆・鈴木 邦治 (1997). 教師の勤務構造とメンタルヘルス 多賀出版
- 佐野 洸文・水澤 慶緒里・中澤 清 (2013). 教師のバーンアウト要因に関する研究 関西学院大学心理科学研究, 39, 69-74.
- 迫田 裕子・田中 宏二・淵上 克義 (2004). 教師が認知する校長からのソーシャル・サポートに関する研究 教育心理学研究, 52, 448-457.
- 社団法人日本産業カウンセラー協会 (2012). 報道資料 あなたのとなりにいる人は元気ですか? 社団法人日本産業カウンセラー協会
- 下田 桃子・武内 珠美 (2015). 小学校教師のバーンアウトの実態・経過と支援・予防に関する研究 ——2人の中年期女性教師の疲弊についての語りから—— 大分大学教育福祉科学部附属教育実践総合センター紀要, 33, 65-80.
- 曾山 和彦・本間 恵美子 (2006). 教師のメンタルヘルスに及ぼすサポートグループ参加の効果 ——自尊感情, バーンアウトの視点から—— 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要, 28, 111-118.
- 鈴木 邦治 (1993). 教師の勤務構造とストレス ——ストレスの認知的評価を中心に—— 日本教育経営学会紀要, 35, 69-82.
- 東京都教職員組合 (2012). 生き生きと働くための私たちの権利 東京都教職員組合 北多摩東支部
- 山本 奨・杉江 征・山際 勇一郎・勝倉 孝治 (1995). 小・中学校教員のストレスに関する研究(1) 日本教育心理学会第37回総会発表論文集, 550.
- 米川 和雄・大原 朋子・北川 裕美子 (2015). 教師のメンタルヘルス不全による休職と子どもの諸問題との関連性 帝京平成大学紀要, 26(2), 177-188.
- 吉武 久美子 (2018). 教師の学校ストレスを緩和する要因としての, 教師自身の認知の切り替え, 管理職の関わり方, 学校集団内の人間関係についての考察 長崎純心大学 純心人文研究, 24, 137-151.